

第1部

多文化教育ファシリテーター養成プログラムと
教案「*Multicultural Me 多文化な私*」

The 1st Chapter

The Multicultural Education Facilitator Program
Activity: “*Multicultural Me*”: Understanding Culture and
Ourselves in a Unique Way

Parte 1

Programa de Facilitador Educacional Multicultural e
Multicultural Me (Multiculturalismo em Mim):
Compreensão da Cultura e de Nós Mesmos

第1部

多文化教育ファシリテーター養成プログラムと 教案「Multicultural Me 多文化な私」

Jon Dujmovich(ジョン ドウモビッチ)

*英語の原文を基に、分かりやすく日本語に書き換えたものです。

概要

第一部では、多文化なバックグラウンドを持つ若者を対象に、彼らが実際に経験してきたことや自分自身について人前で表現するためのトレーニングの実践を紹介します。本書に掲載されている活動案は、さまざまな設定や状況で利用できるように開発されており、日々の授業へ簡単に取り入れることができます。ぜひ、ご活用ください。

このトレーニングは、オリエンテーションと4つのワークショップ「自分自身を知る1&2(自身の経験を振り返る)」、「自分を表現する1&2(自分についての表現法)」を含む5部構成となっています。最初にこのトレーニングの流れを紹介し、その後に、このトレーニングの中で実践された教案「Multicultural Me 多文化な私」とその他のアクティビティを紹介します。

トレーニングの流れ

オリエンテーション

はじめに、すべての受講者へ本プログラムのねらい、文化、多文化、価値観に関するいくつかの基本的定義と意味、またファシリテーターになるとはどういうことかを説明しました。多文化人としての課題や利点、多文化社会で生活することについて議論し、受講者はイメージ描写アクティビティ(追加アクティビティのアクティビティ1参照:p.14)を通して自己紹介をしました。また受講者に、プログラム受講期間に抱く感情、疑問、意見などを書き留めておくように指示しました。受講者に与えられた最初の課題は、本プログラムを通して何を習得しようと願っているか、また他の受講者に何を伝えたいかを書き記すことでした。オリエンテーションの最後に、講師がグループ全体の異文化に対する感受性の程度を把握するため、また各受講者に適した指導ができるよう、異文化感受性発達尺度 Intercultural Development Inventory, I.D.I (www.idinventory.com)を第1回のワークショップへ参加する前にオンラインで回答するように指示しました。

ワークショップ1

前回の自己紹介について見直しました。受講者は、様々な手段や方法を利用して、自分自身のバックグラウンドや性格について掘り下げて考えました。1つのエクササイズでは、多文化な人々に向けて使われる用語である Third Culture Kids (TCK)「第3の文化を持つ子どもたち」と edgewalkers 「境を歩むもの」の概念を紹介し、別のエクササイズでは、適応するということについて追究しました。さらに多文化人がホスト文化に適応する際に、あてはまる4つの適応形態を紹介しました。

外国人(部外者) 見た目が違う、考え方が違う	隠れ移住者(なりすまし内部者) 見た目が同じ、考え方が違う
受容者(受け入れられた部外者) 見た目が違う、同じような考え方	投影者(内部者) 同じような見た目、同じような考え方

Third Culture Kids: the experience of growing up among worlds, by David C. Polloc, and Ruth E. Van Reken, 1999, Yarmouth, ME: Intercultural Pressより改作

価値観についても説明しました。価値観の3つの基本段階(普遍的、文化的、個人的)を学び、これらがどのように人々に影響を与え、人の行動や信念を形成するのかについて学びました。(追加アクティビティのアクティビティ2参照:p.14)

ワークショップ2

受講者は、自分で書き留めた手記を読み返し、自分のバックグラウンドや価値観を見つめ直すため、ある程度の時間と静かな空間が与えられました。こうすることで、「Multicultural Me 多文化な私(凝縮版)」(後述)という活動を始めるにあたっての心構えが整います。人々が属する文化集団の豊富な源を例証するため、講師は「私は…である」をテーマにしたスライドショーを再生しました。その後受講者は、自分自身のリストを作りだし、「Multicultural Me 多文化な私」のレッスン1,2をワークショップ内で与えられた時間の中で完了するように指導されました。そして次回の講座までに、自分自身についての発表が出来るよう、「Multicultural Me 多文化な私」のレッスン4,5は宿題として課されました。

ワークショップ3

ここでワークショップのねらいは、自分を見つめ直すことから自分自身を効果的に表現するということに変わります。それぞれが作成した「Multicultural Me 多文化な私」のイメージ作品(レッスン6)を他の受講者の前で発表することは、そのねらいに向けても良いスタートでありました。発表にあたり、だれに向かって自分自身を表現するのか、など聴衆者について配慮するようにと指導しました。学習方法(David Kolb, 1984年)、動機付け、聴衆の心をつかむことについても議論しました。休憩後は、ねらい、アクティビティの選択(内容)、順序(過程)について話し合いました。ロールプレイ、シュミレーション、フレームゲーム、文化感覚調査、事例研究、講義など(追加アクティビティのアクティビティ3参照:p.16)、数種類のアクティビティを受講者に紹介、実践しました。

ワークショップ4

受講者は、各自の考えや活動案を発表し、その後それらの改善を求めそれぞれの意見を述べ討論・評論しました。受講者がより深く自分自身の考えについて追究できるよう、「熱い思い」(追加アクティビティ、アクティビティ4参照)と題されたアンケートを配り、回答のための時間とプライベートな空間が与えられました。最後には、受講者と講師と1対1での話し合う機会が用意され、「熱い思い」や活動案の作成について、I.D.I.(異文化感受性発達尺度)の個人結果、その他のトピックについて話し合われました。

教案「Multicultural Me 多文化な私 ～文化と自分を理解する方法～」

■この教案について

多文化教育に関する先導者及び著者 James A. Banks (1997年)より:

“教育者は、生徒が属している社会的なグループについて鋭い洞察力を鍛える必要があり、また生徒の属している文化がどのように彼らの学習方法や態度に影響しているかを認識する必要がある。教育者は、生徒自身が自分の属する文化を認識すること、またその文化の特徴を理解し、それを発信し明確に表現できるようサポートするべきである。文化的な特徴を発信し明確にしていく過程を通して、生徒は自分自身の周囲や地域社会に対して好意的な態度を示すことができるであろう。” (127ページ 原文英語)

『Third Culture Kids』の著者であるDavid Pollock とRuth Van Reken (1999年)は、学校は次世代に文化的規範を伝える重要な役割を担っているが、同時に、それゆえに複数の文化的バックグラウンドを持つ子どもたちにとっては、そのことが問題になる可能性が大きいとも述べています:

“学校は、ある世代が文化と価値を次の世代に伝える重要な役割を担っている。すべての人が同じ文化背景を持っている場合、価値が伝達されている過程にはほとんど気づかず、教えられたことを「正しい」と受け止めるであろう。” (220ページ 原文英語)

教案「Multicultural Me 多文化な私」を利用することは、少数派を包括し、教育者や生徒が持つ「文化」に対しての概念を広げ、国民的文化の定義を拡大することになります。それは、サブカルチャーや個々人が多様性を示すとともに、その多様性を集団で共有し尊重することで達成することができます。その結果、多文化主義社会のための肥沃な土壌作りが促進されます。

教案「Multicultural Me 多文化な私」は全6部の構成であり、誰もが多文化であることを明らかにします。レッスンは簡単に利用・応用することができ、中学生から大人までの様々な年齢、異なる分野で活用することができます。各部は40～60分間の枠で余裕を持って教えることができます(宿題を含む)。

■「Multicultural Me 多文化な私」を活用してほしい人

学級担任

生徒の個性を見出すための活動、良好な人間関係を築くための活動、いじめを最小限に抑えるための活動を探している先生方。いじめが増加しつつあるなか、すべての教員がいじめ減少のため適切な対処法を身につけることは大変重要です。自己内省することで、自己認識を高め、同時に自分のアイデンティティに対する不明確さ(いじめを引き起こす原因のひとつ)も減少できるでしょう。また、活動を通して他人と共感・共有することで、敬意と穏やかな環境が創りだされます。

また活動作品を掲示することで、教室の見栄えもよくなるでしょう。

社会科教員

「文化」の意味について掘り下げて追求したいと思っている先生方。Milton Benette(1998年)の唱える主観的文化の定義「習得・共有された信念、行動、相互作用する人々の価値観の傾向(3ページ、原文英語)」を築くことで、国境を越えた「文化」について幅広い理解を深めることができます。そして、これは生徒たちへ多文化主義、多様性、集団信念と行動の概念を紹介するきっかけにもなります。

英語・外国語教員

内容主体の指導や継続的内容の言語指導の取り組みを探している先生方。この活動は、意義のある自己探求をしながらコミュニケーション能力、ライティング能力、スピーキング能力を伸ばす内容です。

スクールカウンセラー

多文化感覚を身につけたい方。この活動は、生徒を正しく理解することに役立つでしょう。アメリカの心理学者・多文化カウンセリング専門家であるRoger Herring(1997年)は「生徒の世界観を感じ取ることはカウンセリングを成功させるために必要不可欠である」(6ページ、原文英語)と唱えています。生徒の多様化が進むなか、カウンセラーが文化面においての対応スキルを持つ必要性はますます高まっています。

その他

飛躍的に多様化が進み変化し続ける地域社会で文化的感覚を習得したいと願っている方。世界がますます小さくなるなかで、多文化環境を先導していくために必要なスキル、知識、行動力を個々が習得し維持していくことは非常に重要です。

■教案「Multicultural Me 多文化な私」

レッスン1

「私は…である：様々な役割を持つ自分を知る」

時 間：10～15分（導入・まとめ） 15～25分（本題）

準備物：ホワイトボード（黒板）、ノート、筆記用具

展 開：

- はじめに、生徒に日々の生活の中で、自分が様々な異なった立場に立ったり、様々な状況の中で生活していることを思い出すように伝えます。日常生活の様々な場面や状況における自分の役目・役割、属するグループについて考えるよう促しましょう。例として、指導者の生活の中での自身の様々な役割をリストアップして紹介します。大きな役割から小さな役割までいろいろ挙げてみましょう。（例：教師、母親、スキーヤー、音楽家、写真家、自治会長、本の読み聞かせをする係、食器洗い担当など）
- 続いて、生徒が挙げたいろいろな役割の中からそれぞれ10個に絞って、「私は…である。」という文章を作ります。（例：僕は息子である、私は水泳部員である、など）
- 10個にまとめたら、今度はそれぞれの役割に、自分にとって一番重要と思うものからそうでないものの順に順位をつけます。ここでは、指導者は生徒たちになにも声をかけず、他人からのアドバイスなしで、自分が重要だと思う通りに順位付けすることが大切です。ここで作成したリストは、後ほどイメージ作品を作成する際に見直しますので、「私の重要な役割」と題し保管してください。
- 最後に、それぞれの役割や立場での発言の方法やコミュニケーションのやり方は、どれも同じか違うか、指導者の例を挙げながら生徒に聞きます。（例：祖父母への話し方とクラスメートへの話し方は異なる。）また、それぞれの役割や立場での行動や態度についても同じか違うかを聞きます。同じく、指導者の例を挙げましょう。このことについて、次のレッスンまでに考えてくるよう生徒に伝えます。

応 用：

リストに挙げた役割やグループに共通部分や、違いがあるかを見つけ出したり、その役割は割り当てられたものか、もしくは自由に変えることが出来るものなのか議論することで活動を広げることが出来ます。もし、役割が割り当てられたものである場合、誰によって、どんな基準によって決められたのか、もし、自らその役割を選んだ場合、その動機となったものは何か、などの議論もよいでしょう。

レッスン2&3

「社会集団によって異なる行動様式を自覚する」

時 間：2時間(90～180分) 必要であれば宿題の時間

準備物：ホワイトボード(黒板)、レッスン1で作成した役割リスト「私は…である。」、ノート、筆記用具

展 開：

1. 前回のレッスンの復習をします。つづいて、前回のレッスンで指導者が例に挙げた役割の中の1つを選び、ホワイトボードに書きます。その役割を持つすべての人に当てはまる行動や特徴を挙げ、ホワイトボードに書きます。指導者は、できるだけ生徒から回答を引きだすよう促します。
2. 生徒に、自分が選んだ10の役割のそれぞれの行動や特徴の違いを挙げるよう指導します。その役割を持つすべての人に当てはまる行動を挙げます。例えば、バレーボール部員を挙げた場合、すべての人に当てはまる行動として、練習、同じユニフォームを着る、チームの応援などがあります。それぞれの役割に対し、8～10の共通した行動や特徴を挙げるようになります。この段階では、生徒をいそがせず、進み具合をみて、必要であれば助言しサポートしてあげましょう。
3. 次に、それぞれのグループ・集団でどんな言語(丁寧語、くだけた話し言葉、両方の混合)が使われているか考えます。余裕のある生徒に対しては、この話し方が、どのような価値観に基づいているか考えるように指導することで、活動を広げることができます。この発展の活動に関しては、時間を延長したり、指導者のサポートが必要となる場合があります。
4. 10の役割に対しての行動や特徴が挙がったら、似ている役割、全く違う役割に分けます。また、自分の心に一番密接している役割を取り上げてみましょう。後ほどイメージ作品を作る際、心に一番密接していると挙げた役割が作品の中心になるように、お互いに似ていると挙げた役割は近くに配置するようにします。宿題として、次の授業で作成するイメージ作品の下書きやアイディアをいくつか書き出してみることを課すことができます。

レッスン4&5

「作品づくり～多文化な私のイメージ～」

時 間：2時間(90～180分) 必要であれば宿題の時間

準備物：役割リスト「私は…である。」、前回で作成した行動・特徴のリスト、

図画工作で必要なもの(ペン、紙、のり、はさみなど)

展 開：

1. このレッスンでは、生徒が多文化な人間として自分をイメージした作品を作成します。多くの生徒は、ポスターを作品として選びますが、作品の形態や使用する材料に決まりはありません(彫刻、コンピュータグラフィック、アニメーション、モバイルなどでも結構です)。生徒が好きなようにイメージ作品を創るという機会を与えることは、社会や多文化主義における多様化そのものであると言えるでしょう。作品制作の工程をすべて宿題としまわず、授業の中で制作のための時間をとり、指導者が生徒一人ひとりと出来る限りの時間をとり、作品の概要などについて生徒に質問することが大切です。それにより、生徒に深い洞察力をもたらし、作品の仕上がりにも反映してきます。この段階で作品制作に必要な材料は忘れずに必ず用意するようにしましょう。

2. まず、作品の中心部から作り始めます。中心部は、心や魂、真の価値など本当の自分を表現するものとなるので、どのように表現するかよく考えてから作成に取りかかるよう指導します。もし、この段階で行き詰っている生徒がいたら、中心に「私」という文字や、スマイルマーク、自分の名前などでも十分であることを伝え、次に進めるよう指導してください。
3. 心に一番密接した役割を中心を持っていき、他の役割をその周辺、さらに外側に位置付けます。役割の位置を決定する際、レッスン1で作成した「私の重要な役割」を参考にします。似ている役割同士は出来る限り近いところに配置します。例えば、家族関連の役割同士はそれぞれを近くに、友人関連の役割同士はそれぞれが近くにくるよう構成します。いくつかの役割は、他のグループの役割と重複する場合もあるでしょう。この段階で行き詰っている生徒がいたら、出来る限りの位置付けをして、次に進めるよう指導してください。
4. それぞれの役割の位置付けがきまつたら、役割にタイトルをつけ、行動・特徴の説明、使用言語を書き加えます。(図解1参照) その後、それぞれが好きなように作品の装飾をします。よりクリエイティブで独自のスタイルで表現するよう指導してください。

レッスン6

「発表」

時 間：1時限(45～90分)

準備物：レッスン5で作成した「多文化な私」のイメージ作品

展 開：

1. それぞれが創った作品の発表をする日程を決定します。少人数のグループをつくり(1グループ4～6人)、そのグループ内で発表するようにすると、クラス全体の前で発表するよりプレッシャーも少なく、グループ内の親密さも深まり効果的でしょう。アイデンティティを取り扱う繊細なトピックであるということも配慮し、少人数の方が適しているでしょう。
2. 発表者は、作品の概要、関連性を説明し、その後、質疑応答の時間をとります。可能であれば、作品を展示するスペースを設けましょう。
3. 発表を静かに聞く、軽率な質問はしない、など聴衆者としてのマナーを守るよう促します。発表後には発表者に拍手をおくります。

図解1.「Multicultural Me 多文化な私」、中学生～大人の作品例 (P.44 参照)

ワンポイントアドバイス：

この活動を生徒に指導する前に、指導者がすべての工程を実際に行なうことを奨励します。指導者自身の多文化についての洞察力を深めるだけでなく、各工程の時間配分や、各段階で配慮すべき事項を把握することが出来、スムーズな授業進行に繋がります。

追加アクティビティ

アクティビティ1

「自己のイメージ表現(ウォームアップ)」

時間：5～10分(描写)、10～15分(グループ共有)

準備物：A4用紙(1人1枚)、色鉛筆または色ペン

展開：

1. A4用紙と色鉛筆または色ペンを配ります。多文化な自分を象徴するイメージを用紙に描きます。受講者の独自の創造力で、好きなように絵やイメージを描くよう促します。あまり時間がかかりすぎないよう、制限時間を設定してください。
2. イメージ描写が完了したら、受講者をグループ分けします。少人数グループが最適です。1グループ最大8人までしてください。ひとりずつ作成したイメージ図について、グループメンバーに説明します。聴衆者は質問をせず、発表者のみの発言となります。発表が終了したら、全受講者に向け作品を掲示・展示します。

応用：

グループメンバーを変えて、何度か発表を繰り返したり、聴衆者からの質問を受け付けることで、活動を発展できます。

アクティビティ2

「動作理由づけ三角形：価値の図」

G. Hofestedeのアクティビティ Three levels of mental programmingに基づく

時間：20分(導入と概念説明)、15分(製図)、15分(共有)

準備物：ホワイトボード(黒板)、A4またはそれ以上の大きさの用紙(1人1枚)、筆記用具

展開：

1. 活動に取りかかる前に、指導者は個人的価値、文化的価値、普遍的価値の概念を説明します。受講者はこれらの概念について、ある程度理解している必要があります。
2. ホワイトボードに大きな三角形を描きます。その三角形はすべての動作の思考過程を表すものです。下部は動作の原理を表し、上部は実際に起きる動作を表します。人間がある動作をしようと考え、実際の動作に至るまでの過程は、三角形の下部から上部への流れになります。三角形は3つのゾーンに区切られます。
3. 三角形の上に、「動作」と書きます。続いて、例題として今朝の朝食を挙げ「今朝7時半に、ご飯、味噌汁、卵焼き、オレンジを食べた」と書きます。
4. 次に、各ゾーンの過程が、どうあなたの動作に影響を及ぼしたかを説明します。三角形の最下部から取りかかります。三角形の下から約1/3の位置に、水平な線を描き、すぐ横の三角形の外側に「普遍」と書きます。このゾーンは、普遍的価値または人間性を表します。このゾーンは、人類すべてに共通することで、長年受け継がれてきたことです。受講者に、なぜ人は食事をするのか聞いてみましょう。その答えを三角形の最下部ゾーンに書きこみます。(例：生き抜くために食事は必要不可欠)

5. 次に、三角形の下から約2/3の位置にもう1本の水平な線を描き、すぐ横の三角形の外側に「文化」と書きます。このゾーンは文化的価値であり、同じ集団に属する人々との交流で身に付いた文化的価値です。このゾーンは、その集団に属するすべての人に共通しています。受講者に、好まれて食べられている朝食の文化的理由は何か、また、実際になぜその朝食を食べたのか聞いてみましょう。その答えを2番目のゾーンに書きこみます。(例:ご飯、味噌汁、卵は日本の一般的な朝食である。私の学校の教員のほとんどは出勤まえに朝食を食べる。勤務時間は朝8時からである。)
6. 一番上のゾーンの三角形の外側に「個人」と記入します。このゾーンは個人的価値を表します。ここでの価値は、個々特有であり、生活を通して身に付いたものと受け継いだものがあります。受講者に、あなたがその朝食を選んだ理由を述べましょう。そして、三角形の最上部にその理由を記入します。(例:私は目玉焼きが好きではないので、卵焼きにした。遅れそうで急いでいたので、簡単にできる朝食にした。)
7. 動作は各ゾーンから不均衡な影響を受けていることを説明します。あるゾーンが他のゾーンに比べて、動作に対して大きな影響を与えていることがあります。ゾーンを区切っている2本の線を消し、動作に与えていたり影響の大きさに縦幅を合わせて、再度水平な線を2本引いてください。(縦幅が広いゾーンほど、私たちの行動に強い影響を与えていたりすることになります。) 動作理由づけ三角形の完成図例は図2を参照してください。
8. 今度は、受講者が過去にとった動作や、日常的によく行う動作を選び、指導者がホワイトボード上でデモンストレーションしたように、各受講者が独自の動作理由づけ三角形を製図します。

応用：

この活動は、製図部分を宿題として課すことが出来ます。その際は、次の授業にて発表します。
また、三角形の周りにイラストやイメージ図を描いたり、貼り付けることで表現力を高めることができます。

動作 「今朝7時半に、ご飯、味噌汁、卵焼き、オレンジを食べた。」

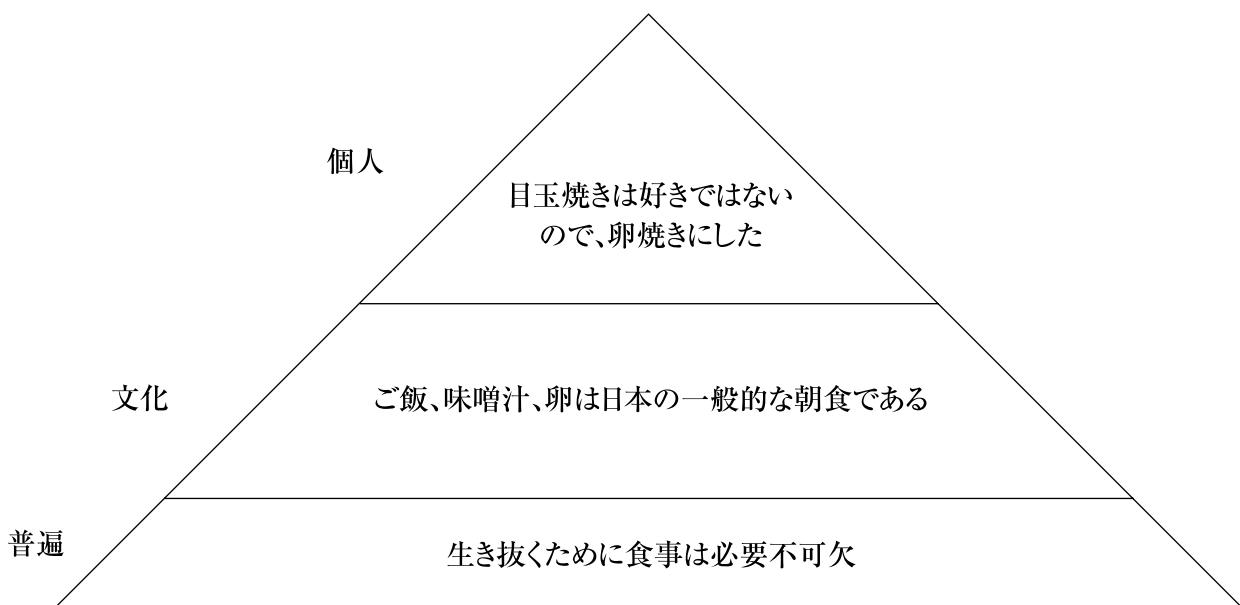


図2 「動作理由づけ三角形」の図例 (p.47 参照)

アクティビティ3

「あなたの生活は多様性にあふれていますか?」

時 間：20～30分(導入とアクティビティ)、結果発表と最終議論でさらに延長可能

準備物：ワークシートのコピー(1人1枚)、筆記用具

展 開：

1. 今回のテーマは「多様性」であることを伝えます。多様性が豊かな環境に身を置くこと、多様化した社会の中で生活すること、多様性にあふれる職場を持つことがどういうことであるかブレインストーミングします。
2. ワークシート「あなたの生活は多様性にあふれていますか?」を1人1枚配り、受講者はシートに記載されている指示に従います。
3. 受講者にどんな結果が出たか質問します。

質問例：最も類似性があるのはどの項目か？

相違点についてはどうか？

生活の多様性を増すのにはどうしたらよいか？

多様性が増すことによるメリット・デメリットは何か？

既存の項目以外に追加できる項目はあるか？

あなたの生活の多様性について正しい結果がでたか？

その理由は？

応 用：

パート2を事前に回答し、授業に持ち込み回答結果について議論します。

あなたの生活は多様性にあふれていますか？

1. ペアを作り、相手の名前を書いてください。すべてのカテゴリーに聞し、相手と同じまたは似ている場合は「S」、違う場合は「D」と記入してください。すべてのカテゴリーの記入が済んだら、別のパートナーを探してください。

氏名	性別	年齢	母国語	教養・学歴	職歴	宗教	民族性	趣味	血液型	髪型	服装
1.											
2.											
3.											
4.											
5.											

あなたの身近な人(5人)を選び、同じことをやってみましょう。

©Jon Dujimovich, 2009.

アクティビティ4

「あなたの“熱い思い”は何ですか?」

自己内省に関する質問：

1. あなたの幼少期・青年期で起きた異文化に関わる経験を思い起こしてください。
どんな良い思い出がありますか?プラスにつながったことはありますか?
2. 記憶の中で、はつきり残るある特定の経験はありますか?
3. 困難な経験はありましたか?もしその経験を変えられるとしたら、どう変えたいですか?
4. 現在のあなたを見てどうでしょう。それらの経験はあなたの人生の価値を高めましたか?
5. 現在の若者たちになんでも言えるとしたら、どんなことを伝えたいですか?どんなアドバイスをしますか?

*参考文献は p.42 に記載